

要旨

児童文学は、絵本をはじめとし児童書、さらに国語教材としても読まれてきた。私たちの語彙・考え方の選択肢・知識を増やし、読解力を育む礎となってきた。

しかし現代、メディアが発達し、モバイルデバイスを利用するのが日常となり、映像を見る時間が増加している。さらに 2020 年からコロナが流行するなかで家にいる時間が増え、よりいっそうデジタルへの依存は大きくなった。その裏側で子どもの活字離れ・読書離れが加速し、読解力の低下が危惧されている。これは、スマートフォンを使いこなす中学生以上だけの問題ではなく、幼児教育・児童教育から考えなければならない問題である。

本稿では、小学 2 年生の国語にも掲載されている、あまんきみこ「きつねのおきゃくさま」にある誤読の問題を論じた。

I 章では、「きつねのおきゃくさま」の内容を、「場面」「ひよこ（たち）の言葉」「きつねの心情」「季節・時間」に分け、まとめた。先行論文を踏まえながらきつねをはじめとした、登場人物の心情を細かく分析し、捕食者であったきつねが、保護者へと変化するの、繰り返されるひよこの言葉が要因であることを論証した。

II 章では、物語の終盤、おおかみと戦ったきつねは〈はずかしそうにわらっ〉て死ぬ。なぜきつねは死ななければならなかったのか、これまでも多くの研究者が論じている。作者あまんきみこもこの部分について言及している。作者の言葉踏まえながら物語を読み解いていった。

III 章では、おおかみがひよこたちを見つけた場面で、〈まだいるぞ、きつねがいるぞ。〉という言葉について論じた。これはきつねの発した言葉なのだが、小学校の国語の授業で、このセリフをおおかみと誤読する児童が多いことが報告されている。その誤読をなくすために、国語教科書は、〈まだいるぞ、きつねがいるぞ。〉のあとに〈いうなり、きつねは とびだした。〉を付け足した。その後、絵本も修正されたという誤読の問題を整理した。

IV 章では、動物における潜在的印象が、読解にかかわってくるのではないかと仮定し、個人が持っている「きつね」のイメージについてアンケート調査を行った。また文と絵の関係に着目し、これが誤読の要因の一つではないかと仮定し、これもアンケートを行い分析した。誤読が起きてしまうページには、おおかみのみが描かれている。次のページをめくると、きつねとおおかみが戦う場面が描かれている。読者は、挿絵におおかみしかいないことから、きつねのセリフをおおかみと誤読したのではないかと推測した。もし仮にこの一文が、きつねとおおかみが戦っている挿絵の場面に書かれていたとしたら、おおかみのセリフと誤読する人は減るのではないかと推測した。実際に改定前の『きつねのおきゃくさま』を用いて〈まだいるぞ きつねがいるぞ〉は、誰の言ったセリフかアンケートを改訂前の「きつねのおきゃくさま」を A・B の二種類に分けてそれぞれ別のグループで行い、A は原文そのまま読み回答してもらい、B では違和感が出ないよう本文のテキストをすべて抜きだし、改めて貼り付け〈まだいるぞ きつねがいるぞ〉の部分なきつねとおおかみが描かれているページの冒頭に移動させたものを用意し、誰の言ったセリフか聞いた。

V 章では、「きつねのおきゃくさま」が掲載されている小学校国語の教科書の「指導内容」「目標」を年代別にまとめ比較し、小学校国語課題について考察し、学習者の読解力を付けていくためには、指導者が作品を良く理解しなければならないことを論証した。